



第 27 号

編集発行／碧南市

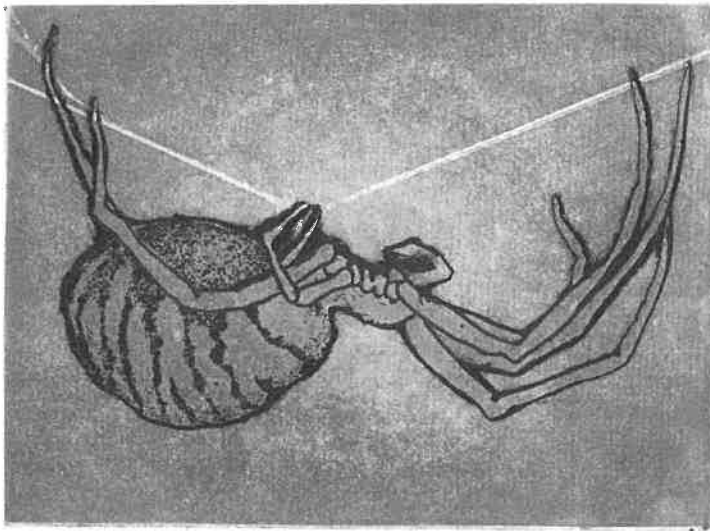
哲学たいけん村

無我苑

所在地／碧南市坂口町 3-100

〒447-0087 : TEL. 0566-41-8522

: FAX. 0566-41-7761



「羞明」

瞑想回廊第二十八回企画展示

『羞明 橋本真理』

詩と銅版画展』

フォトフォビア

羞明

あかるさをおそれる

すでに抜き去られた孤独の血によって

立て替えられている朝の

なんというまばゆさ

賈の占師が天眼鏡で引き寄せる運命線のうえで

夜どおし踊ったあくる日

どこへ引き返そう

こんなにも薄く

未来の倒像がはりつめている水たまりを踏み荒らして

のちの世のまなざしのように鋭い秋の入射角を

いつそう青くときすまして

市街図の余白から家々は立ち上がり

窓という窓で呼び交わす指文字

内へ内へと反る爪を噛み捨てながらこどもたちは出かけ

母たちは連続模様を編みつつづける

世界の凹面に裏糸を渡し

倦むことなく

複数になるために身を裂いたわたしたちの

なんという意志のまばゆさ

すでに抜き去られた孤独の血によって

手をとりあつたまま 家々は昏睡し

夢の孤絶を死の共同と見まがうまで

息ふきかけてはしるす指文字

TVでは無数の鳩が聖火台で焼かれ

その何羽かは燃えながら巣箱に帰り

こどもたちは出かけ

### 肖像

ひとつをうしなうことは  
すべてをうしなうこと  
だから

うしなったものは  
どれも似ていて  
かならず負ける賭け札には  
いつもおなじ横顔がうかんではいる

あの日  
あなたをころせなかつたので  
遂げざる思いが  
こんなにもわたしを不幸にした  
おもかげが  
呼び寄せるたび消えるものなら  
あなたのおもかげを  
何度でも呼び寄せ  
だきしめてはころす

傷で傷を消すいとなみ——  
線は傷である以上  
どんなはげしい分裂もおそれず  
色を差せばにわか  
あざやかな婚姻色に染まり  
幻のふるさとの川へ  
ひしめきさかのぼる魚群の  
どんなかなしい相似にも耐える  
のちのまなざしに贈る不死の裸体  
うしなつたもののおもかげを  
今ここにあらしめる思い  
生み出す力でもなく  
ほろぼす技でもない

描くとは  
ただ 恋なのだ



「水の記憶」



「門」

### 笛

歌口を切ってください  
そうでなければわたしは  
あなたの手にかかった  
一本の篠竹にすぎない

けしてかたきとはおもうまい  
わたしを手にかけた笛師よ

一管の笛が鳴り出すために  
どれほどの欠如がひつようか  
いのちの節の間は  
風よりほかの  
どんな沈黙に  
みたされればいいのか  
あなたもまた  
身のうちの  
うつろを知るなら

歌口を切ってください  
傷が血によってほりさけるように  
血が傷によってほとぼしるように  
横抱きに  
そつと持ちあげ  
息を吹きこんでください  
傷が血によって傷になるように  
血が傷によって血になるように  
だれきくともなく  
皮膚のうちそとにひびきあい  
入り交じる虚空を  
音楽と呼ぶなら

わたしはわたしのうつろなからだがうれしい  
わたしはあなたのうつろなからだがいとしい

「にしばた哲学の小径俳句 i n g」  
を終えて

平成一九年度「にしばた哲学の小径俳句 i n g」を六月十日に開催しましたところ、一般の部では百十二名、小中学生の部では千二百六十三名の方にご投句いただきました。

投句いただいた作品の中から審査員の先生方の選考により選ばれました句を掲載します。



●一般の部

大賞

瞑想の池の殿様蛙かな  
安城市 長田フサエ

特別賞

子を暇な漢が見てをりぬ  
碧南市 橋本 龍昭

哲学とは何ぞ泰山木の花  
碧南市 小笠原掬江

認知症にあらざ花菖蒲に溺れるて  
碧南市 茂木 綾子

噴水を嫌ひし亀に訳を聞く  
安城市 岡田 甲子

哲学の道行く茅花ながしかな  
碧南市 杉浦 小冬

雷鳴や瞑想室に椅子いくつ  
豊田市 加藤 香順

バス停に女ばかりや夕立くる  
碧南市 野々山良子

哲学の小径青田の風透ける  
西尾市 神谷つた子

檜若葉しつとり雨の安吾館  
碧南市 原田 弘子

●小中学生の部

大賞

はなしようぶはながいつばいゆめいつばい  
大浜小一年 磯貝 ひな

特別賞

はなしようぶきものみたないししようきて  
大浜小二年 国松 典子

花しようぶ自信に満ちて咲いている  
新川小五年 神谷 昂汰

花しようぶ白とむらさき話してる  
西端小三年 杉浦 綾音

かみなりでてつ学のみち歩けない  
日進小四年 高山 歩実

透明の水と蛸と紫と  
中央中二年 村上 直美

はなしようぶどじょうもかめもみにきたよ  
棚尾小一年 鈴木 啓也

ありたちはスクラム組んで仕事中  
吉良町白浜小四年 尾崎 沙奈

夏の風わたしのかおにとびついた  
棚尾小四年 中村 紗季

まつすぐにせすじがのびてる花しようぶ

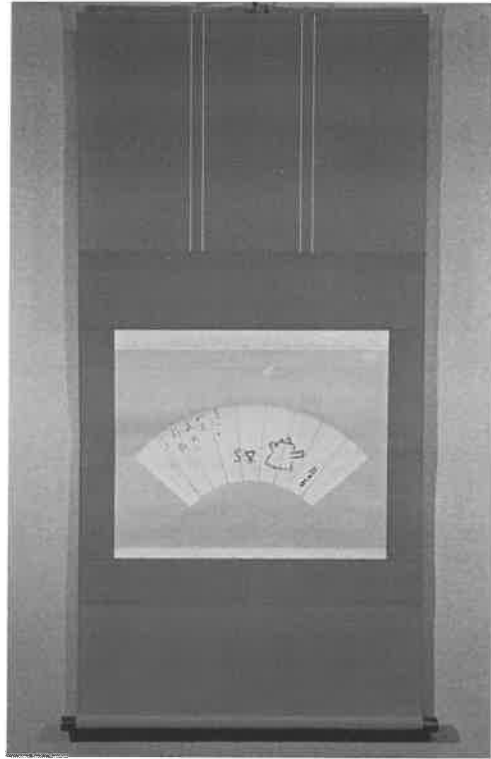
日進小四年 大野 未波



伊藤証信の遺品

杉浦冷石書

「滾々とわく泉ある新樹かな」



杉浦冷石 すぎうられいせき

明治二十九年（一八九六）に碧南市西端の杉浦亀吉の三男として生まれた。本名を嶋（しづ）といった。学問を好み、独学で教員の資格を取り、大正二年（一九一三）に新川小学校に奉職した。

大正六年から新聞記者を志して関西方面に出た。大阪朝日新聞に勤め、社会コースを取材して紙上に健筆を振った。その後大阪毎日新聞社に招かれ、記者として革新的な記事を書き続けた。家庭の事情もあって、愛知県下に勤務を変わり、名古屋新聞や名古屋毎日新聞社に迎えられた。その間新聞の文芸欄を担当し、俳句への造けいを深めていった。

冷石が俳句への関心を持ち始めたのは新川小学校（碧南市）の教師時代に、東端高等小学校（安城市）の市川九四郎校長の影響を受けたことによるといわれている。

大正一三年に冷石は、同志と共に俳句誌『野火』を創刊した。それは、希望と勇氣に満ちた冷石の俳句文学革新への第一歩であった。

その後地元の俳人永井寶水との交友を得て、俳句詩『アヲミ』に投稿したり、俳句の本流であるホトトギス派の同人に参画するようになった。

昭和二三年（一九四八）に郷里の西端

に帰り、俳句誌『白魚火』を騰写刷りで発刊した。中部地区を中心に全国の有志が、冷石の下に集まってきた。俳句誌は新しく『白桃』と名付けられた。西端の台地に美しく咲く桃の花に由来しているという。

一方冷石は、昭和二四年以来中部経済新聞の「閑人帖」欄に、軽妙な筆を振った。

昭和五二年に八二歳の生涯を閉じた。応仁寺に「白魚火や杭につもりし夜の雪」という句碑が建っている。

（碧南事典より）



冷石の句碑（応仁寺）

お知らせ

後期哲学講座

▽メインテーマ

「物語と壺絵 — 絵を読むということ」

かつて南イタリアの諸植民都市を含む古代ギリシア文化圏では多くの壺が作られ、そこに神話その他の物語の描かれたものも少なくない。いわゆる壺絵である。その壺絵を読み取ることで、なぜその壺が作られたか、ある程度その製作意図が推測できる場合もある。そのような例に即して、絵を読むということの意味を考えてみたい。（久野）

▽日程

- ①十二月一日（土）  
「壺に描かれた、ある物語」
- ②十二月八日（土）  
「ある物語を描いた二つの壺」
- ③十二月十五日（土）  
「ある物語と無縁に見える背面の壺絵」

※時間は各回とも十四時から十六時三十分まで

▽場所 無我苑研修道場

▽講師 無我苑顧問 久野昭

▽受講料 千五百円（三回分）

▽申込み 十一月六日（火）午前十時から

受講料を添えて無我苑へ直接お申込みください。